第20回作品　風がはこんだ大ぼうけん　～昔話「風の神と子ども」より～

昔むかし、ある山すその村で起こったふしぎな事件のお話です。…山々の木の葉が色づき始めたある秋の日のことでした。いつものように村はずれのお堂の前で子どもたちが遊んでいると、どこからともなく大きなおじさんが現れて、子どもたちにカキやナシやクリが“ざらんざらん”なっているところに行きたくないか、とさそいました。「知らない人に付いて行くんじゃないよ」って母ちゃんに言われているからと、一度は断りましたが、なんと、おじさんのお尻からしっぽのようなものがニュルニュルニューと伸びてきたではありませんか。おじさんは、子どもたちに「しっぽにつかまれ！」と、言うが早いかビューンと空高く舞い上がりました。

必死でしっぽにしがみついていた子どもたちが、おそるおそる下を見ると、空から見る山々の紅葉は、赤や黄色に色づいて、とてもみごとでした。やがて、おじさんと子どもたちは山の谷あいの平地に降り立ちました。そこにはカキやナシやクリの木の実が“ざらんざらん”なっていました。子どもたちは大はしゃぎで秋の味覚を楽しんだり、鬼ごっこや綱ひきをして遊びますが、突然、大きなおじさんは「俺は行くから、お前たちは自分で帰れ」と言うのです。ポカーンとしている子どもたちを置き去りにして、いずこへともなく飛び去ってしまいました。

見知らぬ山の中にとり残された子どもたちは、無事にふるさとの村へ、あたたかい家に帰ることができるのでしょうか？
―――風が運んだ奇想天外な大ぼうけんをお楽しみください！

ちょっと一言　―劇団員より―

和田莉緒

はじめまして！新たに仲間入りしたピチピチフレッシュ（？）な劇団最年少の和田莉緒（わだ　りお）です。現在、一児の母親で出身は地元倉敷市、なんと劇団唯一の地元出身者です。

私は音楽が好きで、習い事はピアノ・ギター・トランペット…。昔から人前で表現することが好きな子でした。それでも演劇に関しては全くの未経験者の私がなぜ劇団に入ったのかと言うと、学生の頃、演劇の世界に興味を持っていて、その道に進みたいと思った時期がありました。体験レッスンに行ったりしましたが、なかなか前に踏み出せず、そのまま諦めてしまいましたが、大人になり母親になった今、地元にこんなお仕事があるということを偶然知って、一度は諦めていた演劇に、今度こそ本気で挑戦してみたい！と意を決して飛び込みました。できなかったことをできるに変えたい。新しいことや難しいことにも意欲的に挑戦していきたいと思っています。

経験ゼロからスタートの人形劇ですが、子ども達の記憶に「そっと、ずっと」残り続ける、そんな作品を届けられるよう、日々精進してまいります。皆様、どうぞよろしくお願いいたします！

菅麻未

先日、久しぶりに甥っ子（１歳11カ月）に再会しました。近頃は「わんわん」「が一が一」「まんま」などの言葉を覚えて、ちょっぴり意思疎通ができるようになったみたいです。気をつけて聞いていると「あ列」の単語がほとんど。なるほど、一番言いやすい「あ一」から始まって、これから少しずつレベルアップしていくと思うと、とっても興味深い。さらに次の日、公園に行ったときのこと。まだ遊んだことのない遊具に足を踏み入れて「こわい～」と言ったのです。な、なんと！母音が３つも入っているし、名詞じゃなくて自分の気持ちを表現したの？これまでとは格段に高度な発語では!?すごい成長だ‼と勝手に喜ぶ伯母バカな私でした。「こわい」と言いながらも未知の遊具というミッションをクリアして、嬉しそうにはしゃいでいる甥っ子が、とっても逞しく見えました。

普段から人形劇を通して子どもたちと触れ合っていますが、子どもはみんな天才だと思います。様々な経験をスポンジのように吸収して、すごいスピードで成長していく…そんな子どもたちを見習って、私も日々、少しずつでも、成長していきたいと、改めて思いました。

夜斐美和子

私たちの劇団は日本の昔話を素材にしているので、現代っ子には馴染みのない、昔の日本の風景や住居、道具や着物などがいっぱい登場します。私は衣裳担当なので、新作仕込みの度に人形の着物、和服を縫っています。

私が和服に興味を持ったのは、若い頃に外国の人と接したとき。どの国の人も民族衣装を大切にしていて、若い人も年配の人も、堂々と格好良く着こなしているのがとても印象的だったからです。それまでは、和服なんて面倒くさいものでしかなかったのですが、日本の伝統文化としての着物を意識するようになってから、街で素敵に着こなしている人を見るとうっとりして、私も着てみたくなり、着付け教室に通ったり、浴衣を縫ってみたりしました。鏡を見ずに１５分位で着られるようになると、気軽に和服で外出できるようになりました。もともと着物は普段着であり、仕事着でもあったのですから当然かもしれませんね。

若いころには、特別なハレの日ではなくても、日常的に小紋や紬を着てお芝居を観に行ったり、食事に出掛けたものです。でもふと気づくと、機会がないとか、年を取ってきたからとか、仕事が忙しいからとか言い訳しつつ和服から遠ざかってしまいました。私の世代ですらそうなのですから、今の子ども達にとっての昔話の世界は、まるで外国のことのように感じているかもしれません。失われつつある日本の伝統文化を少しでも子ども達に伝えていくのも人形劇の役割だと感じています。

大久保一康

緑内障のために運転免許を返納して半年、歩くことが移動手段の中心になって、つくづく歩行者って危険だなあと感じています。特に冬場の朝夕は暗いので、黒っぽい服装を避け、懐中電灯を持って、交通量の少ない道を歩くようにしていますが、それでも横断歩道を渡っている時に右左折車が止まってくれなかったり、生活道路をかなりのスピードで走っている車や、音もなく追い越す自転車にも驚かされることがしばしばです。子ども達や高齢者の事故のニュースに触れる度に、弱者にやさしい社会であって欲しいと改めて感じています。

高速道路を走っていても、霧や雨の日、トンネルなどでヘッドライトを点灯しない車をよく見かけます。自分は見えるからいいと思っているのでしょうが、自分が見えるかどうかではなく、点灯の意味は他車に自分の存在を知らせることにあると思うのですが…。さらには、スマホどころかマンガ本を読みながら運転しているプロのドライバーがいるのですから、本当に呆れてしまいます。自分のことしか、今しか考えていない大人が増えているのは哀しいことです。自分だけでなく他者のことを、現在だけでなく未来のことを「思いやる想像力」を持って欲しいものです。